王昭君故事の後世の文学の人物描写への引用

阿部　泰記

一　はじめに

王昭君は前漢の元帝時代（前48年－前33年）の「掖廷待詔」（皇帝の召喚を待つ宮女）であり、匈奴の呼韓邪単于に降嫁して和番（異民族との和親）に貢献したことで後世に賞賛され、詩歌・小説・説唱・戯曲の主題となるとともに、後に和番に貢献した女性や異国に流謫された賢者などが王昭君にたとえられた。本論ではこうした例を挙げて後世の文学の人物描写における王昭君故事の引用について考察する。

二　和番の女性

王昭君は和番のため匈奴に降嫁して国難を救った。[1] そこで後世の物語の中では和番のため異民族に降嫁した女性を王昭君になぞらえる。

1．（後漢）劉月英

劉月英は潮州歌『新造玉盒仙琴金宝扇』八巻[2]に登場する丞相の娘。天界の玉女の転生であり、天罰を償うため下界で和番を命じられる。月老仙師は汲水童子の転生である涿州の蕭光祖と結婚させ、厄難を克服させるため、玉盒・仙琴・金宝扇を与えて、月英の肖像を西涼国に飛ばし、光祖の肖像を幽州に飛ばす。月英の肖像を見た西涼王は中国に出兵して月英を要求する。君主（後漢成文王）は漢の王昭君が皇后でありながら奸臣毛延寿によって和番を余儀なくされた故事を嘆く。（「記得漢朝王昭君、身居正宮天下尊。朝中奸臣毛延寿、売国辱主敗五倫。」）（上本四巻）科挙に探花として合格した蕭光祖は月英が王昭君に勝る忠臣だとたたえる。（「賽過昭君先主母、忠心為国喪身体。」）そこへ幽州の女賊が反乱して光祖を婿に要求する。漢王は宰相徐文忠の建言により、光祖を女装させて月英として西涼に派遣し、月英を男装させて光祖として幽州に派遣する。光祖は服喪を口実に西涼王に婚礼を延期させ、王の妹玉瓶公主に実情を打ち明けて夫婦となる。月英も服喪を口実に幽州の女賊に婚礼を延期させ、元帥の娘蘇存蘭が実情を見抜いて、月英の妹として光祖に嫁ぐ約束をする。公主は兄王を欺き追手を打破して辺関を出、光祖は宝扇を使って妖麒麟を撃退する。公主は兄王に投降を勧めるが、兄王は聴かず琉球に逃れる。存蘭は駙馬に亡き父母を祭らせると言って関外に向かうも女賊に疑われて元帥に追われるが、存蘭が元帥に投降を勧め、月英が仙琴で金飛豹を撃退する。月英と存蘭父子は逃げて、光祖と公主に会い、女賊は太白金星に諭されて漢に投降し、光祖は月英･公主･女賊･存蘭を娶る。

2．（晋）桃姮娥

桃姮娥は潮州歌『新造玉環記』六巻[3]に登場する宰相の娘。プロットは元馬致遠『破幽夢孤雁漢宮秋』雑劇に似る。姮娥は書生蔣欽と婚約していたが、奸臣祈封の求婚を拒否したため、讒言によって

[1] 後漢班固（32年－92年）撰『漢書』第九巻「元帝紀」、第九十四巻下「匈奴伝下」。
[2] 潮安府前街老万利蔵版。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』（北京：書目文献出版社、1982年）、152頁。
[3] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、150頁。

父が斬首され、一家は離散する。晋王司馬氏の側室となることを拒んで冷宮に監禁されるが、金蟬公主と姉妹の契りを結び、琵琶を弾いて崔皇后に救われる。奸臣は西番に書を送って公主と姮娥を要求して晋に侵攻するよう唆す。晋王は宮女二人を身代わりに送るが、奸臣が密書で知らせたため、番王は宮女を殺して出兵する。晋王は仕方なく公主と姮娥を西番に送って和番する。姮娥は琵琶を弾いて番兵に『漢宮秋』故事を語る。(「不忠不孝毛延寿、貪心悞国害王嬙。将伊顔容添黒痣、貶入冷宮受惨傷。〔将伊顔容来凶長。〕幸有琵琶訴哀怨、免受冷宮珠泪漣。延寿逃走沙陀中、主母憂容進番邦。昭君出使和番国、親将延寿砕尸亡。後来娘娘投水亡、尸骸逆水回漢邦。万古流伝昭君。」)

3.（隋）義成公主

義成公主（？－630年）は隋の宗室の娘で、開皇十九年（599年）に安義公主の後に突厥の啓民可汗に降嫁し、その後も始畢・処羅・頡利の三可汗に嫁いで三十年近くを突厥で過ごしたが、貞観四年（630年）に唐によって東突厥が滅ぼされた時、唐将李靖に殺害された。『看鑑偶評』五巻[4]、第三巻には突厥の四人の夫に嫁いだことで匈奴の二人の夫に嫁いだ王昭君に勝ると評価する。(隋義成公主、先帰突厥啓民、復嫁始畢・処羅・頡利、蓋有四夫、王昭君不足言矣。)

4.（唐）陳杏元

陳杏元は小説『忠孝節義二度梅全伝』六巻四十回[5]に登場する吏部尚書陳日升の娘。奸臣盧杞の保奏によって和番のため沙陀国に降嫁を命ぜられる。粛宗（711年－762年）の詔勅に言う、「朕は汝の過日出兵せざる罪を責め、宰相盧杞の保奏に汝に娘杏元があると言うにより、今党進に命じて汝に知らしめ、汝の娘に昭君の服色、玉琵琶一面を下賜し、昭君のごとく出塞議和せしむ。」(朕欲責你往日退縮不領兵之罪，相國盧杞保奏言明，卿有女兒名曰杏元，今著黨進領旨，傳與爾知道，聯賜爾女昭君服色，玉琵琶一面，似昭君出塞議和。) 杏元は黒水河の昭君廟に参拝して河に身を投じると、王昭君が力士に救済させる。

5.（唐）朝雲

朝雲は小説『七十二朝人物演義』四十巻[6]に登場する元載（713年－777年）の侍女。唐代宗（726年－779年）が元載に羌胡の平定を命じると、朝雲は元載に従って出塞し、篪を吹いて羌胡の兵士から戦意を奪って退散させ、王昭君とは違った意味でその功績が称えられる。元載が言うに、「外は胡兵に取り囲まれて兵糧も無い。数日までも命は持たないだろう。」(元載道、「外面胡兵為囲得鉄桶相似、況今粮草不給。我和你無翅可飛出危城、只怕数日以来、決難保全性命了。」) 朝雲は慰めて、「漢の高祖は項羽と戦って楚歌を用いて敵兵を追い払いました。月に向かって篪を吹けば、胡人は故郷を思って立ち去り、包囲を解くのではないでしょうか。」(朝雲即忙勧住道、「老爺、不可如此乱了軍心。妾聞漢高帝与項羽交戦、用了楚歌計吹散八千子弟。如今拠妾的愚見、不若向月吹篪、万一胡人有知音的思郷帰去、解了重囲也未可知。」) 朝雲は王昭君が出塞する時のような服装で楼に立って篪を吹く。(那朝雲帯了金冠、穿了繡帯、佩了宝剣、歩上城楼、好一似出塞的昭君模様。) すると胡兵たちは故郷を思って泣き出し、兵器を捨てて立ち去る。(那些胡児、都嗚嗚咽咽説道、「咱与列位俱有家郷、何苦為了郎主一人撇了各人的妻小。」説罷又哭、哭罷又説、一伝十、十伝百、百伝千万、一声吶喊、投戈而散。)

6.（唐）杜賽玉

杜賽玉は潮州歌『新刻金狗精』八巻[7]に登場する奸臣杜岳の娘。顔皇后を殺害して皇后となるが、迫害された陳龍が桃花山・九龍山に立てこもって都城に侵攻し、杜岳とその娘である杜妃とを要求す

[4] 清尤侗撰、康熙庚午二十九年（1690年）自序。
[5] 惜陰堂主人編、嘉慶五年（1800年）刊、福文堂蔵板。
[6] 磊道人撰、庚辰年（崇禎十三年、1640年）序。『古本小説叢刊』（北京：中華書局、1987年－1991年）第十輯収。
[7] 潮州李春記書房、友芝堂梓行。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、168頁。

る。李宰相は漢の王昭君のように杜妃が和番の役割を果たすべきだと建言する。(「万歳可聴古漢王。寵愛昭君娘娘身、被那延寿起禍機、画容帯到単于国、単于国主動刀鎗。更得漢王惨無門、昭君不献起禍根。為保江山是要事、無奈鴛鴦折二方。割捨昭君去和番、不成江山一旦亡。今日都比一般様、杜妃献出無禍根。杜妃娘娘比昭君、亦都不差有幾分。」)

7.(後唐)韓淑妃・尹徳妃

韓尹二妃は『庸盦筆記』六巻[8]の第五巻「後唐韓淑妃為神仙」に描かれる後唐荘宗の后妃。荘宗の死後、石敬塘が反乱を起こし、契丹に援兵を求めるため、二妃の肖像を契丹王に送ると、契丹王は「昔匈奴が一人の王昭君を得たことは永久の美談であるが、自分が一時に二人の美女を得るとは死んでも悔やむことはない。」と喜ぶ。(昔匈奴得一王昭君、遂為千古佳話。今我一挙而得二美人、死且無憾。)これを聞いた隠者鄭遨は契丹王の眼を欺いて二妃を老女に見せ、二妃の貞節を守る。

8.(宋)秦蘭桂・蘭香

秦蘭桂・蘭香は潮州歌『新造双鳳釵』四巻[9]に登場する皇后。秦春奇の娘。物語は元雑劇『漢宮秋』のプロットを借りる。奸臣劉信は秦后の父秦龍が隠遁したのを見て、従兄龐及の恨みをはらすため、娘弄月の姦計に従って秦后の美貌を金番大王に知らせて侵攻させる。秦后は王昭君が奸臣毛延寿に陥れられて投身自殺をしたが、自分も宋王のため和番に行き貞節を守ると誓言する。(「古人昭君為漢王、捨身報主去和番。只為奸臣毛延寿、害到主母去投江。阮今為主到番城、留得後世人伝名。堅節為国不敢怨、思着吾主大恩情。」)

9.(宋)蘇鳳仙

蘇鳳仙は潮州歌『新造忠義節十不全全歌』七巻[10]の後半部に登場する都按察使と側室戴氏の間に生まれた娘。父の死後、悪辣な正室柯氏によって虐待されて総兵陳万安の側室に売られようとするが戴氏が上告し、兵馬司韓義が柯氏と総兵を平民に下し、鳳仙は入内して貴妃に封ぜられる。総兵は審判に不平を訴えるが逆に流罪となったため、高麗に逃亡し、高麗王に蘇妃を強奪するよう唆し、宮女田嬌が身代わりだと告げる。臣下たちは国土を守るために、王昭君のように蘇妃に和番を命じるべきだと進言する。(「吾主比做古先王、漢朝主母去和番。漢王保伊亦不得、不成江山一旦亡。……吾主若不献出娘、国敗難留起禍殃。)蘇妃は劉鴻(梅淡香の転生である趙珍玉と十不全の転生である李廷枝の間の子)と義兄妹の契りを交わして同伴し、出迎えた聖僧に奸臣陳万安を処刑させ、「汝は毛延寿と同じだ。」(延寿共你一般同。)と罵る。九姑聖母廟に祈ると、護身の龍袍を下賜され、触れた番王を発病させ兵権を握る。聖母は英王を諭して蘇妃と劉鴻を宋に帰国させる。だが宋王は奸臣周光の讒言で蘇妃と劉鴻の仲を疑い、蘇妃を冷宮に監禁する。劉鴻は虎牢に入って身の潔白を晴ら、蘇妃は釈放され、周光は斬殺される。作中に九姑聖母が宝衣を与えて蘇妃の貞操を守るなどの場面は清小説『双鳳奇縁伝』に似る。

10.(元)項南金

項南金は弾詞『再造天』十六回[11]の第四回に登場する高麗国の女王。国王が他界したため中国に支援を求め、派遣された国舅熊起鳳に向かって、自分は中国生まれで高麗国に嫁いで二十余年、異国の風土に馴染めず苦しんだが、両国の和平のために尽力し、その功労は王昭君にも劣らないと語る。

---

[8] 清薛福成(1838年－1894年)撰、遺経堂校本。凡例に「是書於平生見聞随筆記載自乙丑(同治四年〔1865年〕)至辛卯(光緒十七年〔1891年〕)先後閲二十七年」と言う。

[9] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、140頁。

[10] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、171頁。

[11] 香葉夫人侯芝撰、道光十四年(1834年)、香葉閣蔵板。譚正璧・譚尋編著『弾詞叙録』(上海:上海古籍出版社、1981年)、156頁。

（「国舅大人呀。人生長在中華、遠嫁何堪夷狄家。雖説貴為高麗后、可憐辜負貌如花。但知羊羔美酒銷金帳、不識香温玉軟呀。吃的是、生葱生蒜生牛肉。穿的是、狐皮貂尾披袈裟。言語不懂性情狠、薄言往愬怒非常。父母蒙恩歳歳至、皆因不慣尽帰家。丢下寡人身独在。幾回揮涙望南鴉、二十余年惟婉順。仍尽忠心為国家、交好歳勤朝貢進。兵甲双休鴨緑江、寡人若与昭君較、労却算勝王嬙。」）

11.（金）女開科

女開科は小説『新鐫古本批评三世報隔簾花影』四十八回[12]の第三十七回で金人が優れた女子を選ぶ試験で、試験に応じる女子を持つ家族はあたかも王昭君を塞外に送るかのように悲しんだと言う。（這些婦女們都是艶粧麗服、傅粉塗朱。也有哭啼在轎裏、父母随着送場、一似昭君出塞一般、哭的千人落涙。）

12.（明）三娘子

三娘子（1550年－1613年）は蒙古俺答汗の王妃。『借月山房彙鈔』十六集[13]の第十集『明事断略』「俺答封貢」（嘉靖）には、三娘子が俺答・黄台吉・扯力克という父子孫三代の順義王に嫁いで中国と蒙古の平和を守ったことは、匈奴の単于父子に嫁いだ漢の王昭君の功績に勝ると称賛する。（俺答起、世宗八年犯塞、至神宗九年乃歿。為辺患凡四十八年。子黄台吉嗣、台吉死、孫扯力克嗣、皆以順義王封貢、終其身。実三娘子忠順夫人之力也。……漢史載昭君及烏孫公主事、皆以一身妻三世、従彼法、中国視為軽重、未若三娘子厥績之茂者也。）

13.（明）黄素娟

黄素娟は小説『大明全伝繡球縁』四巻二十九回[14]に登場する商人の娘で、張居正（1525年－1582年）に侵攻する倭寇を止める方策を進言する。姦淫を目論む鉄威から逃れて川に飛び込み、宰相張居正に救われて養女になる。居正は趙全と周元を遣って倭王俺達に朝貢を促すが、二人は日本に逃げて倭王に侵攻を唆す。素娟は居正に捉えた王孫哪咭を人質にして和議を講ずべきだと説き、居正は感銘する。居正は漢宋の時代と今の時代では和親の仕方は異なる、漢朝に王昭君を塞外に出し、宋朝に金帛を金国に献上したのは、外国が強大で中国が和親を求めたからである、今日では外国が和親を求め、自ら臣下を称し受封を乞う、漢宋の懦弱で和議を求めた時代ではない。（「今日之和与前朝之和大不相同。如漢朝把昭君送出塞外、宋朝将金帛献与大金国、都是外国強盛中国懇求他和好、本非他情願。故賈誼有倒懸之譬喩、寇準不主和議。今日乃外国懇和、自願称臣乞封、是制和者権操在中国、不是権操在外夷、比漢宋懦弱求和、万万不同。」）

14.（清）黄畹蘭（悟枕道人）

黄畹蘭は文言小説『蛍窓異草』三編十二巻[15]の第二編第四巻「女南柯」に登場する杭州の諸生黄履誠の末娘で、西湖の花港に遊んで魚水の楽を慕い、夢の中で依蒲国の王妃になるが、呑舟国が蘭を王昭君のように降嫁させなければ侵攻すると脅す。（「欲仿明妃遠嫁故事、否則致動干戈。」）蘭は自分を棄てて庶民を守ってほしい、自分は王嬙のように青塚を遺して貞節を表したいと言い、（「請為王却万乗之強敵、保一邦之黎庶。竊比王嬙、以報主知。留取塚草之青、更表貞風於不朽。」）龍宮にも毛延寿がいるのかと嘆き、（「龍宮亦有毛延寿、又把丹青誤美人。」）王に霊魂が帰るのを待て、決して黄金で身を贖うなと言う。（「君王只待香魂返、莫費黄金贖美人。」）そして西湖の放生池に似た場所に到ると、清流に身を投じると目が覚め、薄命を嘆いて出家し、棲霞観の女道士となり、悟枕と名を変える。

---

[12] 清四橋居士撰、清本衙蔵板。
[13] 清張海鵬輯、嘉慶十七年（1812年）序、虞山張氏刊本。
[14] 清咸豊元年（1851年）広東富桂堂刊本。
[15] 清長白浩歌子著、隨園老人続評、柳橋居士重訂、光緒二年（1876年）梅鶴山人序刊本。

三　薄命の佳人

王昭君は美人薄命だとする考えに基づく。たとえば唐沈佺期（656年？－714年？）『王昭君』に「薄命由驕虜、無情是画師。」と詠み、小説『新鐫移本評点小説繡屏縁』二十回[16]の第一回には佳人薄命について西施・王昭君・緑珠・楊貴妃の例を引き、王昭君は絵図によって苦しめられたと言う。（至於佳人薄命四字、全然不曉得世事的説出這句話。自古真正佳人、命決然不薄。你道為何不薄起来。西施見辱於亡国、昭君困抑於画図、緑珠墮粉於高楼、太真埋環於荒駅。這都是命薄所致。）王昭君は毛延寿が匈奴に肖像画を献上して降嫁を迫られ、漢帝と離別することになった。潮州歌『新造西番碧邪枕全歌』五巻[17]では唐李文貴の許嫁である洪宝珍の刺繡歌の中で王昭君が毛延寿によって主君との仲を引き裂かれたと歌われる。（再繡漢朝王昭君、出塞和番泪紛紛。可恨奸賊毛延寿、害主鴛鴦拆散羣。）『西湖拾遺』四十五巻図三巻[18]の第三十七巻では氤氳大使が薄命の宋の女子朱淑貞に対して、西施が呉国を転覆させたので王昭君に転生させ、君王の寵愛を失い漠北に死する運命を与えたと言う。（昔日西子傾覆呉王社稷、我嫌他生性狠毒、故転世為王昭君、呉王転世為毛延寿、点壊了昭君容貌、使他有君不遇有寵不招、直罰到漠北苦寒之地。）後世の物語でもこれに類するできごとを王昭君故事にたとえる。

1．（隋）侯夫人

侯夫人は小説『新鐫全像通俗演義隋煬帝艶史』八巻四十回[19]に登場する隋煬帝の宮女。王昭君が毛延寿への贈賄を拒絶したことにならって、宦官許廷輔への贈賄を拒絶して煬帝と会えないことを悲観し、詩歌を遺して縊死する。侯夫人が言うには、「漢の王昭君は、たとえ肖像に痣をつけられようとも、決して千金を贈って画師を買収しなかった。それで一時的に被害に遭って遠く単于に嫁いだが、後に琵琶と青塚によって逆に不朽の芳名を勝ち得、誰からも憐れまれ惜まれ、竟に永遠の美人となった。妾は昭君には及ばないが、もし珠玉を小人に贈って寵幸を求めれば、本当に恥ずかしいことだ。」（侯夫人道、「妾聞漢王昭君、寧甘点痣、必不肯以千金去買囑画師。雖一時被害、遠嫁単于、後来琵琶青塚、倒落了個芳名不朽。誰不憐她惜她、畢竟不失為千古的美人。妾縦然不及昭君、若要将珠玉去賄賂小人、以邀寵幸、其実羞為。」）

2．（唐）崔晤の娘

筆記小説『玉芝堂談薈』三十六巻[20]の第五巻「数有前定」に『異聞録』（『太平広記』百六十巻「秀師言記」）を引いて述べる。陰陽術に長じた薦福寺の僧神秀が李仁鈞の将来を予言して南昌県令となり、従兄弟である崔晤の娘を娶ると告げる。李がこれを崔に告げると、崔は自分の娘は薄命であっても田舎の老人には嫁ぐはずはなかろうと答え、李は単于に嫁いだ昭君よりも幸福だろうと応じ、二人は大笑する。（崔曰、「我女縦薄命、何能嫁与田舎老翁作婦。」李曰、「比昭君出降単于猶是生活。」二人相顧大笑。）

3．（唐）劉無双

劉無双は唐の伝奇小説『劉無双伝』[21]に基づいて創作された明の伝奇『明珠記』四十三齣[22]に登場する朝臣劉震の娘。王仙客の許嫁であったが、父が逮捕されて掖庭に入る。第二十一齣「別母」では無

[16] 清康熙庚戌九年（1670年）弄香主人序、蘇庵主人編次、荷蘭漢文研究院藏日本鈔本。『古本小説叢刊』第十二輯収。
[17] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、160頁。
[18] 清陳樹基撰、乾隆五十六年（1791年）序刊本。
[19] 明斉東野人編演、不経先生批評。明崇禎辛未四年（1631年）序、人瑞堂刊本。
[20] 明徐応秋撰、明刊本。清補刊本。欽定四庫全書本。
[21] 唐薛調撰。
[22] 明陸采（1497年－1537年）撰。明毛晋輯『六十種曲』収。明崇禎間毛氏汲古閣刊、清道光間重修本。

双は自分の薄命を王昭君の薄命に重ね合わせる。（〔前腔〕（尾犯序）「薄命合遭逢。自古佳人。偏受磨磨。試看遠嫁昭君。涉胡沙万重。孩児就此拜別。」）清の伝奇『双仙記』三十六齣[23]の第二十六齣「謫陵」では無双と宮女たちは皇陵の掃除を命じられ、琵琶を持たない王昭君のようだと嘆く。（「〔旦〕骨肉抛離涙不乾。〔老〕此生無復憶長安。〔貼〕渾如出塞昭君怨。〔浄〕只少琵琶馬上弾。」）

4．（唐）杜瑶娟

杜瑶娟は弾詞『安邦後伝鳳凰山』七十二巻七十二回[24]に登場する杜長卿の次女。第六回で秦司馬は瑶娟が趙王に冷遇されているのは権勢を有する龍氏が嫉妬しているからだと推測し、王昭君が毛延寿によって漢王との仲を裂かれたことを例に挙げる。（此情寔出張龍氏、悍妬相欺太逼人。趙王惜玉怜香性、尤恐他今尚未聞。昭君遍〔偏〕遇毛延寿、定有中間作弊人。）

5．（明）馮小青

馮小青は筆記小説『遺愁集』十四巻[25]の第十三巻に記載される武林馮千秋の妾。『牡丹亭還魂記』の杜麗娘に同情し、「人間亦有癡於我、不独傷心是小青。」と詠んだ。正妻に嫉妬され鬱屈して死に、吟詠した詩作の多くは正妻に焼かれた。（小青才色絶世、所適非人、悒鬱而死。吟咏盈箱、惜俱為妬婦所焚。）周君建は「懺詩」を作って王昭君の匈奴への降嫁と比較し、「昭君遠嫁文君老、枉死人間一小青。」と悼んだ。

6．（清）過端芳

過端芳は小説『三分夢全伝』十六回[26]に登場する江南鎮江府の県丞過全忠の娘。第六回では、好色の知府鄒愛廉の魔手を逃れたことが世間に知られ、福建長汀県の苻朝玉からの縁談が来たのも王昭君が遠く単于に嫁いだようにやむを得ざることであったという。（看官你道苻公為何要求這親。原来端芳的才貌、久有人伝。又因有鄒愛廉一節、芳名愈顕、所以殷殷来求。惟是這段姻縁、倒像是王昭君遠嫁単于、斉景公聯姻呉国、真是無可奈何之事。）

7．（清）一佳人

『咏雪楼稿』五巻[27]の第三巻「未亡草」『薄命嘆』に、王昭君のような一佳人が岐路に泣いているのを見て訳を尋ねると、美人薄命で父母に捨てられ、兄に身を売られ、主人に酷使されていると告げて姿を消した、自分は帰宅して急いで詩に詠んだと言う。（「傷哉岐路一佳人、眼星眉黛鬢烏雲。流麗堪追越西子、端荘不減漢昭君。双眸含涙凝秋水、一点朱唇囀鶯語。我輿過此偶見之、呼前問是誰家女。為何憔悴泣路岐、不将心緒告人知。女郎回頭細覷説、妾乃紅塵薄命姫。祇縁少小臉如蓮、痛哉爺娘即棄捐。阿兄忙把女身鬻、不愛骨肉惟貪銭。可憐事主遭主酷、凌虐横加焉敢哭。……言罷趨歩向高岡、令我目送空相望。……還家太息筆忙揮、為賦紅顔多命薄。」）

四　美貌の烈女

筆記小説『息影偶録』八巻[28]の第八巻「軼事」には王昭君を烈女と呼ぶ。基づいた故事は明伝奇『昭君出塞』であり、毛延寿が匈奴に逃亡し、単于に真の昭君には額に腮に紅痣があると言って成帝が送った昭君が偽者と見破る。昭君は出塞するが、縊死して結婚を拒み、墓には緑色の草が生えた。昭

[23] 清研露楼主人（崔応階）編著、乾隆丁亥三十二年（1767年）序、香雪山房蔵板。
[24] 清海陵軒刊。譚正璧・譚尋編著『弾詞叙録』、77頁。
[25] 清張貴勝撰、清康熙二十七年（1688年）刊本。
[26] 清張士登著、何芳苡評。清嘉慶二十四年（1819年）序刊本
[27] 清甘立媃（新呉女史徐室）著、男心田校。嘉慶丙子二十一年（1816年）咏雪老人自序、半偈斎蔵板。
[28] 清張埏撰、清嘉慶九年（1804年）刊本。

君はまことに永遠の烈女であると言う。（昭君入胡之後、不肯為婚。單于逼之、遂自經死。故胡地多白草、而昭君墓草獨青、則一心不肯背漢、昭君真千古之烈女。『葭鷗雑識』）これによって貞女の鏡としての王昭君像が伝わった。

1．（唐）尹若蘭

尹若蘭は小説『載花船』四巻十六回[29]に登場する年若い宮女で、則天武后に命じられて宦官に扮して美男を捜す。第三巻第九回では若蘭は『王嬙小伝』を読んで王昭君に同情するが、夢に王昭君が現れて自分は遠く匈奴に嫁いだが心はいつも漢宮にあったと告げられて感激し、題詠する。（若蘭日処深宮、毫無別事、適案頭有本『王嬙小伝』、取而閲之。看到奉命和戎、琵琶写恨之処、為之涙落。掩巻嘆曰、「佳人薄命、一至於斯。」到晩、奄奄睡去、忽夢昭君明装艶雅、態度蹁躚、笑対若蘭曰、「吾漢時明妃也。千秋湮迹、致辱垂怜、敬此造謝。」又道、「咳。姐姐你只知弱質遠処胡庭、那知俺夢魂常依漢闕哩。」若蘭未及回言、為砧声驚醒。天明、憶夢有感、遂擬明妃夢回漢宮題、作詩一律。）

2．（宋）黄菊娘

文言小説『五金魚伝』二巻[30]は宋の宣和年間、書生古初龍が五人の美女程華玉・趙如燕・黄菊娘・黄桂娘・王玉嬌を妻妾とする風流故事。古初龍が程華玉らと弾劾を避けて京都を離れた時、黄桂娘が昭君祠を見て、母が道士と淫らな関係を持って道士の子との婚姻を強いたため出奔した菊娘の恨みは、匈奴に降嫁した王昭君の恨みよりも甚だしいと言う。「昔王嬙は毛延寿の姦計に堕ちて単于に降嫁し、終身恨みを抱いた。今妾の姉菊娘は母の非道な行いのために天涯に出奔し、誰の手に落ちるのか分からない、その怨恨は王昭君よりも甚だしい。」と嘆く。（昔王嬙堕延寿之計、出嫁単于、抱恨終身。今妾姐氏為母行不軌、奔走天涯、不知落於誰手、其怨恨殆有甚者焉。）そこで詠んだ『昭君怨』二絶は『漢宮秋』雑劇の内容である。其の一「何事ぞ丹青の客、神を伝えて朔方に入るや。幾番の風雨の夜、魂夢は昭陽を繞る。」其の二「昔は是れ漢宮の女、今は胡地の妻と為る。琵琶は空しく恨みを抱くも、誰か与に関西に到らんや。」

3．（宋）王婉容

王婉容は徽宗の王妃。徽宗とともに金国に連行されるが、粘罕が嫁にしようとすると、自刎して貞節を守る。『詩話類編』三十二巻[31]の第七巻「節義」に王子虚の詠史詩を掲載して王昭君に恥じないと称賛する。「王婉容は徽欽に随いて北去す。粘罕之を見て、子婦と為すを求むるも、婉容車中に自刎し、虜人之を道旁に葬る。英烈と謂うべし。後に宋子虚『詠史詩』に云う、「貞烈那ぞ堪えん黠虜の求め、玉顔甘んじて没す塞垣の秋。孤墳若し是れ青塚に隣せば、地下に昭君見て亦羞じん。」（王婉容随徽欽北去、粘罕見之、求為子婦。婉容自刎車中、虜人葬之道旁、可謂英烈矣。後宋子虚『詠史詩』云、「貞烈那堪黠虜求、玉顔甘没塞垣秋。孤墳若是隣青塚、地下昭君見亦羞。」）

4．（明）舒氏

舒氏は筆記小説『新鐫全像評釈古今清談万選』四巻[32]の第二巻「玉簪示信」に描かれる烈女。金華府義烏県の鄭氏の子の妻で、正統十四年（1449年）に処州の凶賊葉宗流に捕らえられるが、決して凌

---

[29] 明西泠狂者撰、抄本。

[30] 呉暁鈴蔵残本（下巻）、古本小説集成第三批（上海：上海古籍出版社、2017年）収。万暦四十八年（1572年）序刊『風流十伝』八巻収。李夢生校点『風流十伝』八巻（天津：百花文芸出版社、2002年）。馮夢龍増補、余公仁批補『増補批点図像燕居筆記』九巻・下十三巻（宮内庁書陵部蔵、上海古籍出版社、1990年－1994年）下之八巻収『五金魚伝』は簡本で、『昭君怨』は第一首を載せない。

[31] 明王昌会編、明刊本。

[32] 明泰華山人撰、明周近泉刊。

辱されず、縊死する。衣帯に遺した詩に言う、「両眼から流れる涙は西風が吹き、あたかも昭君が漢宮を出るかのよう。故郷の夢は何時届くやら、家書も何時通じるか。忠孝の心に愁いは果て無く、眉を顰めて恨みは尽きず。世間を騒がす戦火は見渡すかぎり、傷心した私は何も言えない。」（双垂玉筋泣西風、好似昭君出漢宮。郷夢不知何日到、家書難擬幾時通。一腔赤胆愁無限、両簇顰眉恨不窮。擾擾干戈塵満目、傷心都在不言中。）

5．（明）梁鳳鳴

梁鳳鳴は弾詞『増補繡像玉夔龍全伝』六巻五十七回[33]に登場する参将の娘。兵部鄒応龍の子鄒虹の許嫁であったが、応龍の死後、父梁通から鄒虹との離縁を迫られ、国舅張豹の側室になるよう上京を強制される。周囲は小説『双鳳奇縁伝』二十巻八十回を紹介し、鳳鳴に皇帝への忠節を尽くした王昭君に倣って貞節を守るよう勧める。（漢朝有個昭君女、夢内姻縁伴帝君。也為奸臣来作怪、美人図献外邦人。単于国、起刀兵。相争殺色為昭君。漢王劉王無可奈、把那昭君献出国安寧。君臣分別千般苦、骨肉分離苦万分。昭君不負劉皇義、守節何曽失自身。但願千金梁氏女、貞心尤如漢昭君。）

6．（明）陳烈女

陳烈女は湘陰の人。陳光国の娘。章曠（1611年－1647年）の妾。『恒斎文集』十二巻[34]の第九巻『弔陳烈女』二首有序に、章曠の死後、蓮の実を拾って自給している時に、武弁陶甲が父に求めて舟に乗せたが、深淵に至って入水自殺した。その第二首に青塚に安眠している王昭君と比較している。「訝しいほど広く清らかな湘陰の水、長い間にどれだけの霊魂を送ったことか。娥皇と女英が出遭って遺跡を語れば、きっと昭君の墓だけに青い草が生えていることを恨むであろう。」（怪底湘流泯泯清、千秋断送幾魂霊。英皇相遇談陳迹、応憾昭君一冢青。）

7．（明）徐氏妻

徐氏妻は小説『近報叢譚平虜伝』二巻[35]の第二巻「徐氏妻貽虜完節」（叢譚）に登場する。明末に満州族が薊州（河北省）を侵略して捕らえられ、建州の酋長に嫁ぐよう迫られるが、服喪のため半月の猶予を請い、韓氏の婦と同居して貞節を守り、自害を決意する。徐氏の妻が韓氏の婦に言うには、「たとえ昭君墓のように青草が生えたにせよ、結局何の役に立ちましょう。早く死んだほうが幸せです。」（縦如昭君墓，青草生塚，竟亦何補。不如早死為幸。）徐氏の子はたまたま隣室にいてこれを聞き、ともに逃亡する。酋長も夫婦愛に免じて追跡しない。

8．（清）呉絳雪

呉絳雪は浙江金華府永康県の烈女。絳雪は字で、名は宗愛。伝奇『桃谿雪』二巻二十齣[36]の主人公。康熙十三年（1674年）、清に投降した武将耿精忠が福建で起兵して謀反し、総兵徐尚朝に浙東・金華・処州を陥落させた。徐尚朝は呉絳雪の美貌に惹かれ、絳雪を差し出せば永康は屠戮を免れると脅す。呉絳雪は承諾するふりをして賊を県外に誘い出し、崖から跳び下りて自尽する。清許楣『徐烈婦伝』には王昭君がもし絳雪であったなら、出塞して自殺し天子の恩愛に報いたであろう（仮令昭君如絳雪、吾知其出関、必自殺以報天子）、節操を全うした点で絳雪は昭君に勝る（完節勝昭君）と述べる。

---

[33] 清光緒癸巳十九年（1893年）、上海書局石印本。譚正璧・譚尋編著『弾詞叙録』、142頁。
[34] 明李文炤撰、弟芳華評選、四為堂蔵板本。
[35] 明吟嘯主人撰、明刊本。
[36] 清呉廷康採輯、黄燮清填詞、咸豊辛亥元年（1851年）序、同治十三年（1874年）雲鶴仙館刊本。道光丁未二十七年（1847年）刊本。

五　離郷の人畜

王昭君は遠く北方の匈奴に降嫁した。その離郷の悲哀は「昭君怨」「昭君嘆」として楽府に詠まれた。[37] 後世の物語でも同様の境遇に遭遇した人物や禽獣を描いて「昭君出塞」にたとえる。

1．（元）江南幼女

筆記小説『山房随筆』一巻[38]に駅亭に多くの戯作詩があると言い、杜氏婦作『北行詩』を挙げる。江南を離れて妓女となった幼女の悲哀を王昭君の出塞の悲哀にたとえる。「江南の幼女郷閭に別るるは、一に昭君の遠く胡に嫁すに似たり。黙黙として一身故国を離れ、区区として千里狂夫を逐う。慵く簫管を拈んで羌曲を吹き、懶く羅裙を繋ぎて鷓鴣を舞う。多少の眼前の悲泣の事、如かず花柳の旧き江都に。」（江南幼女別郷閭、一似昭君遠嫁胡。黙黙一身離故国、区区千里逐狂夫。慵拈簫管吹羌曲、懶繋羅裙舞鷓鴣。多少眼前悲泣事、不如花柳旧江都。）

2．（元）王実甫

『絵像西廂記伝奇』八巻[39]の第二巻「読第六才子書西廂記法」五十九には『西廂記』の作者に慷慨して琵琶を抱いて出塞する王昭君の姿を描かせれば、無数の才能がありながら不遇な身の上の者が涙を流させることができると高く評価する。（五十九。若教他写王昭君、慷慨請行、琵琶出塞、他便写出普天下万万世、無数高才被屈人、満肚皮眼涙来。我読西廂記知之。）

3．（明）王翠翹

王翠遶は小説『貫華堂評論金雲翹伝』四巻二十回[40]に登場する北京大名府の商人の娘。第一回では「月児高」詞によって佳人薄命を説き、王昭君が塞外に嫁いだことを挙げる。（這一曲「月児高」、単道佳人命薄、紅粉時乖、生了絶代的才色、不能遇金屋之栄、反遭那摧残之苦。試看従古及今、不世出的佳人、能有幾个得無破敗。昭君色奪三千、不免塞外之塵。）第五回では盗賊を匿った冤罪で投獄された父を救うため身売りをして臨清の客商の妾となる。周囲の者は蔡文姫や王昭君のように遠くに嫁入りするわけではないので悲しむ必要はないと父母を慰める。（「又不是文姫遠嫁、昭君出塞、同在大明国内、何須苦苦傷悲留恋、辜負令媛一段孝意。」）

4．（明）高朋

高朋は伝奇『海虬記』二巻十六齣[41]中に登場する参将。巡撫李乗に命じられ海図を見て海大王の足跡を訪ねるが、船が難破して海玉蝉（大同公主）に救助され、伊連島に逗留する。海大王（外山王海杰）は妻姚氏（大同夫人）から高朋の到来を聞いて驚く。第九齣「聴琴」では、高朋が遠い故郷を思って琴を弾くと、玉蝉が侍女に曲名を「昭君怨」だと教え、侍女が昭君は女性なのに高朋はなぜ「昭君怨」を弾くのかと尋ねると、心情が同じだからと答える。（小旦「咳。事異情同、藉以寄意耳。」）高朋の曲では砂塵が舞い胡笳が響く匈奴の地にあって遠く離れた漢の宮殿を思う王昭君の怨みを唱っている。（〔園林好〕「幾万里塵沙撲天。十八拍胡笳声喧。怎得不教人孤怨。只恨那画図裏粉脂妍。沙漠地玉容捐。」）

5．（明）曲雲仙

曲雲仙は小説『新鐫繡像小説天湊巧』三巻[42]の第三巻に登場する武芸者老曲の娘。乗馬・射撃が得

---

[37] 後漢蔡邕（133年－192年）『琴操』「怨曠思惟歌」。宋郭茂倩『楽府詩集』第五十九巻「琴曲歌辞」収。
[38] 元蔣正子撰。欽定四庫全書本。『藕香零拾』本。
[39] 清金聖嘆編、清刊本。
[40] 別名『双和歓』、『双喜夢』。清青心才人編次、清刊本。
[41] 清陳烺（1743年－1827年）撰。『玉狮堂十種曲』第四種、清光緒年間刊。
[42] 清羅浮散客鑑定、清初刊本

意である。明万暦年間、朝鮮を襲撃した倭寇を撃退するため、浙江の武将方法坤も駆り出されるが、その家僕方興は遼東で雲仙を娶る。二人は若主人方偶を護衛して浙江に帰るが、家僕方忠は雲仙の武術を知らず、雲仙に腰が痛くないか、琵琶が無ければ昭君出塞にならんぞと嘲笑する。（方忠還道是个尋常女子、説、「嫂子腰疼麽。少了琵琶、做不得昭君出塞哩。」雲仙也只是不答理他。）後に方偶は雲仙を強奪しようとするが、雲仙は方偶を撃退する。（那雲仙……手指公子、大喝罵道、「你這忘恩負義的狂徒。我自遼東一路上保護你回来、不但銭財不失、還全了你的性命。我好端端的夫妻、你怎么生拆我的、倚着勢力強要占我。」）

6．（清）張菊知

張菊知は『一園詩集』十二巻[43]の第六巻「張菊知の出塞するを聞きて寄贈す」（聞張菊知出塞寄贈）詩に描かれた県知事。張菊知の出塞を王昭君の出塞にたとえて、「漢宮にはどれほどの美人がいたか、だが彼女たちは死後にその名を遺していない。不遇にして琵琶を弾いて出塞した宮女がいた、彼女こそは王昭君という絶世の美女であったのだ。」（漢宮多少美人身、死後如何杳不聞。不遇琵琶弾出塞、誰知国色是昭君。）と賛美している。

撰者の兪廷挙は、広西全州出身、乾隆戊子（1768年）の挙人、四川定水県知事。作品には『一遠詩集』、『金台医話』などがある。張菊知は、山西陽城出身の挙人、名は錦、菊知は号である。高潔な性格で、乾隆年間に大名府清豊県知事の時、貪欲で重税を課す府知事を批判したため新疆伊犁に流されたが、それを苦にせず詩文・戯曲を楽しみ、『蜃楼集』、『新西廂記』、『新琵琶記』などの戯曲を創作している。張菊知の出塞とは新疆伊犁への流謫を指し、張菊知の高潔さを王昭君の国色にたとえている。兪廷挙との関係は具体的にはわかりにくいが、兪廷挙には、「都に到りて一二日、山右（山西）の張菊知来訪し、補詩一首を贈らるれば、次韻して之に酬う」（到都一二日、山右張菊知来訪、補詩一首見贈、次韻酬之）（『一園詩集』巻六）という詩があり、「海内で誰が知己であろうか、もちろんそれは我ら両人である。三年の間遠く離れていたが、詩を作り酒を酌めば十分に親しみが生じる。この地で夜月を愛でて春風に吹かれ、この時に花を看て馬を走らせる。理想郷は今では遠くない、君には元気を出してほしい。」（海内誰知己、相関我両人。河梁三載別、詩酒十分親。夜月春風地、看花走馬辰。蓬山今未遠、望爾倍精神。）と詠んでおり、二人は敬愛する間柄であった。

7．（清）雲南象

雲南を出た象は『清風草堂詩鈔』八巻[44]の第六巻「王雨豊、錦川に傅たり。同に出象を看る」（王雨豊傅錦川同看出象）詩に、四川に来た雲南の象を絶域に嫁いだ王昭君にたとえて同情する。「東城に花を看たが幾科も無いため、玉河からきた人馴れした象を看に来た。……中に憂鬱気な象が一頭いて、眼を半開きにしてはまた閉じる。雲南の知人と昔遊んだことが思い、日暖かく酔って金沙江に水浴したことを想っているようである。……辺境に生長して中国に老いるのは、王昭君が絶境に嫁いだようなもの。故郷を思わないものがあろうか、〔？〕。笑って王君に語りかける、私と君も自由を得られたらなあと。」（東城看花無幾科、来看馴象出玉河。……中有一象如有憂、倦眼半開還復収。似憶滇僰思旧遊、日暖酔浴金沙江。……生長徼外老中国、即如昭君嫁絶域。誰無故土心往復、象形会意是亦或。一笑為語王同学、尚得自由我与若。）

8．（民国）羅伽陵

羅伽陵は猶太人の富商Silas Aaron Hardoon（1851年－1931年）の妻で夫を助けて商売を繁盛させた。『欧司愛哈同先生栄哀録』十六章[45]の第十章「輓詩」中に「結婚」と題し、優秀な猶太人のハルドーンと傑出した中国女性の羅伽陵との結婚は中国国内で行われ、王昭君のように出塞するまでもなかったと

[43] 清兪廷挙撰、嘉慶壬申十七年（1812年）序刊本。
[44] 清余崢撰、乾隆丙辰元年（1736年）序、道光四年（1824年）序刊本。
[45] 姫佛陀編、民国壬申二十一年（1932年）愛麗園校刊本。

詠む。(「西欧秀美推猶太、東粤清華勝浙杭。両地人材皆傑出、一家妻室作鴛行。何須遠出昭君塞、祇許如帰甥館蔵。」)

六　絶世の美女

王昭君は絶世の美女として伝えられており[46]、美貌の女性が登場すると王昭君や西施にたとえられた。

1．(漢) 張皇后

張皇后は潮州歌『新造背解紅羅』二十八巻[47]に登場する漢宣王の皇妃。第二十四巻で悪僧海雲が王昭君のような美貌の張皇后を見初める。(路上遇着張皇后、海雲一見魂魄空。疑是神明下凡来、無非昭君出塞。)

2．(漢) 蔡美姫

蔡美姫は潮州歌『新造伯皆子香羅帕全歌』四巻[48]に登場する蔡邕(133年－192年)の娘。その美貌が王昭君にたとえられる。(単説伯皆妻共児、趙氏牛氏甚相得、二男一女在身辺。……細妹名字叫美姫、容貌生得世間稀。……金蓮三寸歩軽鬆、頭毛七尺如烏雲。咲時不露硃砂唇、後人不識昭君貌、此女容貌賽昭君。)

3．(唐) 梅月英

梅月英は小説『説唐演義後伝』五十五回[49]に登場する女将。第三十三回で、その容姿は西施・王昭君に比較される。(但見那員女将梅月英、怎生模様。……勝比昭君重出世、猶如西子再還魂。)

4．(唐) 楊貴妃

楊貴妃は伝奇『長生殿』五十齣[50]の第三十八齣「弾詞」にその美貌を西施・王昭君にたとえられる。(〔三転〕「那娘娘生得来仙姿佚貌。説不尽幽閒窈窕。真個是花輪双頰柳輪腰。比昭君増妍麗、較西子倍風標。似観音飛来海嶠。恍嫦娥偷離碧宵。」)

5．(唐) 蘇錦蓮

蘇錦蓮は小説『異説後唐伝三集薛丁山征西樊梨花全伝』十巻九十回[51]に登場する蘇鳳の娘。祖父蘇廷方が羅通に殺害されて蘇鳳が西番哈迷国に逃亡し、錦蓮は皇后となって祖父の敵を討つため唐を攻める。その美貌は昭君の再来と称えられる。(只見蘇錦蓮帯領了三千番婆、一声炮響、沖出営来。但見他頭戴開龍金冠、狐狸尾倒掛、雉尾高挑、面如満月傅粉、粧成両道秀眉、一双鳳目、小口桜桃、紅唇内細細銀牙、身穿一件黄金砌就魚鱗甲、腰繋八幅護腿繡龍白絞裙。小小金蓮、踹定葵花鐙、騰雲馬、手持打将神鞭。勝比昭君再世、猶如西子還魂。)

6．(唐) 曹翠娥

曹翠娥は潮州歌『新造李旦仔全歌』八巻[52]に登場する忠臣曹彪の娘。九姑仙女に鄧淮玉との姻縁を告げられ、紫雲洞で仙術を伝授される。翠娥は元帥となって奸臣馬周を討つ。その出で立ちは王昭君のようだと称える。(腰掛宝剣並刀弓、背挿紅旗繡鳳龍。金蓮三寸垂風擺、貌賽桃花悦人胸。粧扮起来如仙姫、

[46] 後漢蔡邕(133年－192年)『琴操』「怨曠思惟歌」に「顔色皎潔、聞於国中。」、范曄(398年－445年)『後漢書』(432年)第八十九巻「南匈奴伝」に「昭君豊容靚飾、光明漢宮、顧景裴回、竦動左右。帝見大驚、意欲留之。」と言う。民国徐哲身『漢代宮廷艶史』百二十回の第四十九回など近現代では一般に西施・貂蟬・楊貴妃と並べて古代四大美女の一人とみなされる。

[47] 潮州府前街瑞文堂蔵板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、175頁。

[48] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、164頁。

[49] 清鴛湖漁叟校訂、乾隆四十八年(1783年)観文書屋刊本。

[50] 清洪昇撰。暖紅室刻匯刻伝劇第二十八種。

[51] 清維経堂刊本。

[52] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、164頁。

凡女生好難比伊。恰似昭君重出世、令人一見病相思。）

7．（唐）宝桂香

宝桂香は潮州歌『新造白蓮花全歌』八巻[53]に登場する宝文の娘。第五巻でその容姿を西施・王昭君にたとえられる。（唇紅如珠歯如銀、面如桃花髪霞雲。弓鞋三寸腰楊柳、賽過西施王昭君。）

8．（宋）趙妙英

趙妙英は潮州歌『新造雙鸚鵡全歌』五十巻[54]の第四十八巻に登場する京城城外白沙村の娘。容貌は王昭君のようだという。（生得一貌如昭君。）このため鼠の妖怪に誘拐される。

9．（宋）八宝公主

八宝公主は小説『新鐫異説五虎平西珍珠旗演義狄青前伝』十四巻百十二回[55]に登場する単単国の公主。その美貌は王昭君にたとえられる。（威風凛凛、一位女英雄。桃花紛臉、国色天姿。看来這公主、渾如昭君出塞一般、独是手梨花鎗与琵琶不象。）

10．（宋）段紅玉

段紅玉は潮州歌『新造五虎平南全歌』十六巻四十二回[56]に登場する蒙雲関の将軍段洪の娘で、狄龍を見初めて嫁ぐ。第六巻十六回に紅玉を王昭君の再来だと言う。（狄龍見那段紅玉、双目金金看伊人。果然絶色世無双、恰似昭君再世人。）

11．（宋）巴秀琳

巴秀琳は小説『増訂精忠演義説岳全伝』二十巻八十回[57]に登場する平南関を守る総兵巴雲の娘。父を韓起龍に殺されたため、起龍と戦うが敗れる。その出立は昭君出塞と見間違えるほどであると描く。（頭戴包発燗銀盔，扎着斗竜抹額，雉尾分飄；身披鎖子黄金甲，襯的団花戦襖，繡裙飛舞。坐下一匹紅鬃馬，執着両柄日月刀。生得面如満月，眉似遠山，眼含秋水，口若桜桃。分明是仙女下凡，却錯認昭君出塞。）

12．（宋）韓愛姐

韓愛姐は小説『続金瓶梅』六十四回[58]の第十八回に登場する。琵琶を持たない王昭君だと形容する。（只見船辺上又走出一個年少的婦人、有二十一二歳年紀。但見……呑肩蟒袖、昭君馬上少琵琶、到膝官靴、焉支山下無顔色。）

13．（宋）賽昭君

賽昭君は伝奇『清平楽』[59] に登場する高麗国の女王。宋末に金陵に侵攻した時、常州人の時化が従軍し、時化に「清平楽」詞を見られたことから天縁と考え、時化と夫婦になる。

14．（宋）李師師

李師師は『宋代十八朝艶史演義』百回[60]の第六十一回に登場する東京の名妓で徽宗の寵愛を受けた。その容貌は琵琶を持たない王昭君にたとえられた。（徽宗止歩観看、只見翠簾高巻、簾児下有個佳人、便仔細打量。見她髪蔽烏雲、釵簪金鳳、眉横新月、目送秋波。腰如迎風楊柳、貌若出水芙蕖。待道是昭君、不曽抱着玉琵琶。待道是楊妃、不曽擎着白鸚鵡。）

15．（金）胡女

---

[53] 潮州義安路李万利出板。
[54] 潮州府前街友芝堂蔵板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、145頁。
[55] 嘉慶辛未十六年（1811年）聚錦堂刊本。
[56] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、136頁。
[57] 清銭彩編次、金豊増訂、甲子年（同治三年、1864年か）余慶堂金豊序、錦春堂蔵板。
[58] 清丁耀亢（1599年－1669年）撰。
[59] 原本の所在を知らず。『曲海総目提要』四十二巻（清黄文暘原本、民国董康等校訂。民国十七年〔1928年〕、上海大東書局排印本）に梗概を記す。
[60] 民国李逸侯・趙夢雲撰、厳独鶴評点、民国十七年（1928年）上海五権書社。

胡女は伝奇『蕉帕記』三十六齣[61]の第二十七齣「打囲」に登場し、その扮装を昭君和番にたとえる。（〔南步步嬌〕「（胡女）寶凳斜籠双彎小。纖手把琵琶抱。烏雲護錦貂。似一幅昭君和番般貌。看風颭絳裙飄。儼紅雲一朵飛來俏。」）

16.（元）李宮人

李宮人は『文安集』十四巻[62]の第二巻『李宮人琵琶引』に描かれた女子。至元十九年（1282年）に良家の子として入内し、琵琶ができたこともあって、世祖フビライハンは李宮人を王昭君にたとえた。（鄂県亢主簿言、「有李宮人者、善琵琶。至元十九年、以良家子入宮得幸。上比之昭君。」）その辞に、「茫茫たる青塚は春風の裏、歳歳に春風吹き起きず。伝え得たる琵琶馬上の声、古今只有り李と王のみ。李氏は昔在至元中、少小に家辞し来たりて宮に入る。一度世皇に見えて芸の妙なるを称えらるれば、珠歌玉舞は忽ち空の如し。」（茫茫青塚春風裏、歳歳春風吹不起。伝得琵琶馬上声、古今只有李与王。李氏昔在至元中、少小辞家来入宮。一見世皇称芸絶、珠歌玉舞忽如空。）

17.（明）月仙

月仙は小説『新鐫警世陰陽夢』十巻四十回[63]に登場する宦官魏進忠に寵愛された妓女。美貌は王昭君・西施にたとえられる。（蔣家分外小心、加意奉承、叫那新姐児出来陪酒、果然標緻。只見……纖指斜撥琵琶、疑似昭君出塞。金蓮緩步檀塵，宛如西子行春。）

18.（明）春風

春風は小説『新刻小説幻中遊醒世奇観』四巻十八回[64]の第七回「窮秀才故入陰魔障」に登場する娘。「耍孩児」曲によってその美貌を西施・王昭君にたとえる。（「口輔児端好、眸子児伝神。豊姿甚可人。又雖不是若耶溪辺浣紗女、却宛似和番出塞的王昭君。」）

19.（明）劉明珠

劉明珠は潮州歌『新造劉明珠穿珠衫』二十一巻[65]に登場する首相劉光辰の養女。第五巻に西施・王昭君と比較する。（読書過眼免思量、小小女子識文章。西施昭君未可比、就是南海観音娘。）

20.（清）賽昭君

小説『清宮十三朝演義』百回[66]の第四十六回に登場する礼部侍郎の後妻。（原来京裏有一位礼部侍郎姓荘的。他年紀已六十歳了、只因死了結髪妻子、便在窰子裏去娶一個姑娘来。那姑娘名「賽昭君」、他面貌的美麗。且不去説他、他年紀只二十四歳、生性十分活潑、常常愛在外面閑逛。）

21.（清）嬙恵

嬙恵は筆記小説『屑玉叢譚』二集[67]の初集収『海天余話』に登場する妓女。王姓で山東蘭陵出身の美女であったことから蘭陵嬙と呼ばれたと言う。（蘭陵嬙恵、山東里人。遷呉有年矣。珊珊玉骨、妍妙天然。臨風一笑、花葉紛綸。喜清談、有弁才。不軽見客、邀其一顧者、如登閬。……本姓王、人賛其美、以昭君況之、呼為蘭陵嬙。『呉趨雑詠』〔静帆〕、「難道明妃出漢宮、玉顔圧尽艶粧紅。西楼斜月分明照、一朶梨花一桁風。」）

22.（清）妓女

妓女は小説『老残遊記』二十回[68]の第十三回で西施・王昭君に比喩される。（那些説姐児們長得好的、無非却是我們眼面前的幾個人、有的連鼻子眼睛還沒有長的周全呢、他們不是比他西施、就是比他王嬙。不是説

[61] 明単本撰。明毛晋輯『六十種曲』収。
[62] 元揭傒斯（1274年－1344年）撰。欽定四庫全書本。
[63] 安道人国清編次、戊辰年（崇禎元年、1628年）序刊本。
[64] 清煙霞主人編述、歩月斎主人編次、本衙蔵板。
[65] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、159頁。
[66] 民国許嘯天（1886年－1946年）撰、民国十四年（1925年）上海新華書局排印本。
[67] 清銭徴・蔡爾康輯、光緒四年（1878年）申報館排印本。

他沉魚落雁、就是說他閉月羞花。）

23.（清）珍娘

珍娘は小説『杏花天』四巻十四回[69]の第一回に登場する富商藍芝の長女。美貌を王昭君にたとえられる。（藍母迎入、随令珍娘与貞卿並立、斉斉于花燭下交拜。真果是郎如擲果、女賽昭君。）

24.（清）嬌雲公主

嬌雲公主は志怪小説『影談』四巻[70]の第四巻「龍門」に登場する龍王の娘で、龍門の科挙に合格した馮栄に嫁ぐ。麗人鏡に照らして美貌に変わり、馮栄は公主が王昭君に似て絶世の美女であると称える。（公主謂曰、「君謂我貌似王嬙、何処見之。」曰、「従古美人推昭君第一、以是知之。」）

25.（前朝）楚碧月

楚碧月は潮州歌『新造錦鴛鴦全歌』三巻[71]に登場する吏部楚鳩の娘。秦侍郎の子志高の許嫁であったが、奸臣潘曹が王昭君よりも美貌だと言って愚昧な徳宗の王妃に推挙する。（「臣聞楚鳩有一女、只女就堪為正宮。年紀正有十八春、天資国色賽昭君。」）

七　おわりに

以上、王昭君故事の後世の文学における引用について実例を用いて検証した。紙数の関係ですべてを紹介することはできなかったが、その結果、王昭君の本来の使命である和番に貢献したことによる後世の和番に貢献した女性の描写において引用され、王昭君の和番を薄命と考えて後世の薄命の女性の描写に引用され、王昭君が異郷に嫁いだことから異国に流謫された賢者や故郷から連れ去られた動物の描写に引用され、元雑劇で匈奴の黒江に身を投げて貞節を守ったことから後世の烈女の描写に引用され、美貌であったことから妓女など後世の美女が王昭君にたとえられたことが判明した。王昭君像はこのように詩歌・小説・説唱・戯曲などの文学を通じて、深く庶民の心に刻みこまれていったと言える。

なお王昭君故事の民間への浸透は文学のみならず民俗にも及んでいる。昭君廟の建立は唐李遠『聴王氏話帰州昭君廟』[72] などに見られて王昭君の神格化が早くなされていたが、『虚受堂文集』十六巻[73]の第十六巻には王先謙（1842年－1917年）の母が孫を亡くしたため『昭君抱子図』を飾ったと言う。[74] 王昭君が琵琶を抱いた画はあっても子供を抱いた画があるとは聞かないが、清代には王昭君の霊験に期待する風潮が起こったと考えられる。さらに清代には「昭君紙鳶」[75] など王昭君の画図を描いた民芸品が制作されたり、社夥（祭日の演芸）に「昭君出塞」が上演されたりしていた。[76] その人気は甚だしかったと思われる。

---

[68] 清劉鶚撰、汪原放句読、民国十四年（1925年）上海亜東図書館排印本。
[69] 清天放道人編次、白雲山人批評、本衙蔵版。
[70] 清管世灝撰、清光緒二年（1876年）申報館鉛印本。
[71] 潮州義安路李万利出板。譚正璧・譚尋編著『木魚歌潮州歌叙録』、189頁。
[72] 李遠、大和五年（831年）進士。『聴王氏話帰州昭君廟』、（清）金人瑞《貫華堂選批唐才子詩甲集》第七巻七言律、『御定全唐詩』（康熙四十二年、1703年）第五百十九巻收。
[73] 清王先謙撰、光緒二十六年（1900年）刊本。
[74]「（光緒）七年（1881年）辛巳、七十四歳。（太夫人）以孫男女相継殤、恒悒悒不楽。」
[75] 清袁枚（1716年－1798年）『和金沛恩詠昭君紙鳶』、『隨園詩話』第九巻收。清黄道讓『昭君紙鳶』、『雪竹楼詩稿』第一巻收。清吳宗愛『紙鳶有作昭君像者戯賦四首』、『徐烈婦詩鈔』第二巻收。日本江馬天江（文政8年〔1825年〕－明治34年〔1901年〕）『昭君帋鳶』、『退享園詩鈔』（明治34年［1901年］刊本）第一巻收。
[76] 清顧禄撰『清嘉録』第一巻「正月・行春」。